

## 平成29年度高浜市誌編さん委員会【第1回】

平成29年7月14日（金）

### 1. 委員長あいさつ

【神谷委員長】 編集委員会が正式にスタートし、曲田先生には大変お世話になっている。これで市誌編さんが本格的にスタートしたことになる。後ほど、事業の進捗についての報告を聞いていただき、編さん委員会として、大きな方向性を考えていけるといいと思う。今回の市誌の特徴である、「聞き書き」を盛り込むことに関しては、大学生との打ち合わせもすでにスタートしており、他にない試みなのでとても楽しみでもある。本日は、みなさまからの積極的なご意見をお願いしたい。

### 2. 議題

#### (1) 編集委員会の協議内容及び部会活動の状況について

<事務局 資料1にもとづき説明>

【曲田副委員長】 6月17日に行われた編集委員会は、それぞれの部会に分かれて多くの意見が出た。この市誌を進めていくにあたり、どのような形で進めていくのいいかについて、積極的な意見交換がなされた。編集委員会委員の大半が高浜市以外の方なので、高浜のイメージを共有しなければいけないし、そこは、私や生活誌部会の佐野先生がうまく繋いでいけるようにしたいと思う。ここにいらっしゃる方はほとんど高浜の方なので、みなさんと編集委員会とをうまくつなげていきたい。

編集委員会の中でまだ十分に検討できていないのが、いかにして市民の方がわかりやすいものを市民の目線で作るかということ。これまでの編さん委員会において、「市誌が本棚のこやしになってはいけない」という意見が出ており、これは私としても非常に印象深く、そこを編集委員会のみなさんにもわかってもらわないといけない。よって、いかにしてわかりやすいものを作るかということで、目次の構成も少し変えた方がいいと思っている。これまでは、通史的に網羅するというイメージがあったが、近世・近代はとても網羅的にはできないと感じるところもある。先史・古代・中世は通史的なものとして書くことができるかもしれないが、近世・近代・現代は見開きの2～4ページ程度のところで完結したものを並べながら高浜市がわかるというような作りも必要かと思う。

もうひとつ、このあとまた郷土資料館の資料整理についてお話があるかと思うが、資料

館から実に様々な資料が出はじめている。まだ全貌は確認できていないが、高浜・高取の戦前の役場の資料が出てきているし、吉浜公民館からは吉浜村役場の資料も出てきた。このように、近代の部分では前回の市誌で使われなかった資料がかなり見つかったので、それをどのような形で盛り込んでいくかということが重要になってくる。また、「高浜市の歴史を紐解いてきた歴史」もどこかで扱えればいいかなと思う。どういう形でここ高浜の歴史が作られてきているのかということ。近世・近代・現代部会は、7月8日に集まって資料調査を行ったのだが、調査員のみなさんからもそのような意見が出てきた。

明治7～8年頃に村誌を高浜・吉浜・高取がそれぞれ作っているのだが、市全体でこういったものが見つかる地域は他の自治体ではないと思う。そういった、「過去から現在に至るまで歴史を編さんしてきた」という事実は、もっと大きく取り上げるべきだろうと思う。

先ほど、委員長の話にもあったように、大学生が市誌編さんにこういった形で関わることあまりないと思うので、世代を超えた感覚で作れることを大事にしていこうと思っている。この点に関しては、編集委員会で多少異なる意見も出るのではないかと考えていたが、そういうこともなかった。今回の取り組みの事情もみなさんわかっただき、他の自治体でいう民俗調査のところは他の部会でカバーしないといけないという声が上がった。文化財部会や現代部会は自分たちがやろうという声が上がってきているので、今回カバーができないと思ったところも皆さんがカバーしていただけるという体制が整ってきた。生活誌部会で大学生がやっているようなことは他の部会も応援して、それを補完するような形で作っていこうという雰囲気が出せたのがよかった。こういったことの一步一步が良い市誌に向けて進んでいくし、市民の方もこれから入っていただけて色々な資料をわかりやすく表現できるというようなことにつながっていくと思う。

ただし、ひとつ懸念しているところは現代の部分である。「福祉のまち」あるいは「大家族たかはま」のイメージをこれからまた行政の方と一緒に作っていかなくてはならない。古い時代は色々な先生のお力をお借りしながら、またこれまでの市誌もあるのでできると思うが、近々のところをどうまとめていくのが大切になってくる。現代の部分が、未来に繋いでいく高浜の新たな歴史になると思うので、今後また内容などを詰めていって課題を挙げながら、次の編さん委員会の時にはこんな形でできるのではないかと報告できればと思う。そういう意味では順調な滑り出しができたのではないかと。また、編さん委員会と編集委員会を繋ぐところは、私と神谷委員長とで橋渡しをしながらや

っていければと思う。

【委員】 今後も色々な資料が出てくるので、高浜市誌プラス付録みたいな形で、高浜の百年を写真でふりかえるような別の冊子を作ってほしい。明治の中頃から土管や瓦作り等で高浜は栄えてきたが、もうひとつ忘れてはいけないのが土器。ここにも注目してほしい。高浜市誌の別冊も出ているが、そこからまだ調べていないことがあると思う。現在もまだ土器を焼いた窯が残っていたりするので、そういった現物が残っているうちに調査して、次の世代に残していかなければいけないと思う。最初は土器を作っていたが、瓦屋に転業したという流れもあるので、瓦にも関係してくる。戦時中は鉄製品がなくて、土器が盛んに売り出されて、皆さんの生活の道具になったということもある。

【曲田副委員長】 土器については、碧南にはまだ作っている方がおひとりいらっしゃる。土器は非常に大事だと思うので、エリアを新川沿い、高浜川沿いと少し広範囲に広げて調査したい。使用した粘土をどこで掘ったか、どこで焼いたかといったことも合わせて調査していきたい。

【委員】 現在も高浜市内では辰巳製陶所さんがホウロクを作っている。

【神谷委員長】 高浜に土人形を作っているところはあったのだろうか。

【委員】 碧南は知っているが、吉浜には土人形は記憶にない。

【委員】 現在の郷土資料館は、例えば民具についてしっかりとした使用法の説明がないのでわかりにくい。今回の市誌ように、冊子をまとめていくことも大切だが、動画もあるといいと思った。

【委員】 以前広報に、郷土資料館だよりというのがあり、郷土資料館の所蔵資料が紹介されていた。貴重なものがたくさんあったので、整理してわかりやすいようにしてもらいたい。

【神谷委員長】 触れてもいい資料があれば、「やってみる・体験できる」というスペースができるといい。岡崎の美術博物館が市内の人たちから古い足踏みミシンが何十台と集まったそうで、展覧会でそれらを並べて、実際に使ってもらったという。そういう体験ができると、今後につながっていく気がする。

【委員】 市誌を作っても本棚のこやしになってしまうというのが一番問題になると思うので、市民が、やっぱり高浜っていいまちだなと思ってもらえるようなものにしなければならない。また、近隣市の方もそれを見たくて高浜に集まっていただけのようなきっかけ作りになれば非常にありがたい。また、それをベースにした企画もやっていけたらいい

と思う。

【委員】 吉浜の養鶏について調べると、とりめしのことも出ている。地域の嗜好でとりめしも違うので、そういったことも取り上げてもらえるといい。

【曲田副委員長】 先ほどのお話は非常に重要で、文化財的な感覚と観光とがどんどんつながっている。高浜の中だけで考えることも大事だが、少し広域に、碧海エリアで考えられないかと思う。なので、編集委員会には刈谷・安城・碧南などの文化財や博物館に関わる方にも入っていただいている。これにより、エリアを少し広げながら、高浜と安城、高浜と碧南とか、それをうまくつなぎながら観光と結びつけ、碧海郡の中の高浜であると位置付けたい。そういったなかで先史・古代・中世部会であがったのは、いかに「高浜らしさ」を出していくかとういこと。広域で見たときの高浜らしさってなんだろうかということ、皆さんで考えていく。今後、高浜市だけでなくもう少し広域な範囲でこういった話ができるようにしたい。また、文化財のところはもちろんだが、他の分野や業務でも日頃からお付き合いがあると思うので、その辺を意識してできればいいと思う。

【委員】 高浜市は旧高浜町、それ以前は高浜村・吉浜村・高取村、それらが合併してできた。なので、3地区の人たちが協力して市誌を作っていくのが理想的。市民調査員のなかで、高浜エリアは具体的な方の名前が出ていないが、中心となって参加いただく方はどなたになるのか。

【事務局】 神谷委員長や、文化財保護委員会の神谷弘子先生が、高浜エリアの代表ということで調査協力員をお願いしている。

【曲田副委員長】 町内会は非常に大事なものなので、ここをどのように表現していくかは大切。あとは、3か村については考え方が難しい。他の自治体だともっとたくさんの村が合併していたりするので1つ1つの内容のボリュームが小さくなりがちだが、高浜は3つしかないののでどう考えるかが非常に難しい。編集委員会のメンバーが、早めに各地域のイメージを捉えることが大切。

【委員】 皆さんのお話を聞かせていただいて、大変ありがたい。これが完成した際は商業・工業の歴史がわかるという意味合いを持ったものができることを期待している。

【曲田副委員長】 今後、遠方への調査も発生してくるかと思うが、早速文化財部会は広島・呉で調査をしたい。呉の港をつくる際に用いられた人造石の技術が、高浜の服部新田にも関連するからである。知人をよく高浜の郷土資料館に案内し、人造石を見てもらうのだが、これは非常に貴重なもので、ブロックにしたものは恐らくここだけじゃないかと

思う。今のコンクリートブロックのように積み上げていく人造石というのは非常に珍しい。いろいろな人を連れていくと、こんなところに置いておくものではないと言われるくらい大事なものである。まだ日程は決まっていないが、予算に限りがあるので早めに呉に行って調査したいと考えている。

【委員】 明治用水の「ドンドン」のところに、長七タタキと思われるものがまだ20メートルほど残っている。

【曲田副委員長】 文化財部会の粕谷委員とも話したが、指定文化財になっているものはもちろん対象であるが、それ以外で今後文化財になりうるだろうものを発掘して文化財にしていくことにつなげていきたい。これに関しては、文化財保護委員ともうまく連携しながら進めていきたい。今回の市誌で紹介をして、今後どのような形で後世に伝えていけるのかを判断していただきたい。なので、様々な情報をお寄せいただければと思う。

## (2) 郷土資料館整理の進捗状況について

<事務局 資料2にもとづき説明>

【曲田副委員長】 写真の通り、最初は大変な状態からのスタートであった。何十年の間郷土資料館に様々なものが持ち込まれていたが、なかなか整理ができていない状態であった。置き場所がないため棚の隙間にもたくさんのもを入れていた。調査をする時に一番考えたことは、やみくもに調査をするのではなく、現状を大切にしながら行うということ。持ち込まれた経緯もわからないものもある中で、まずはかつての高浜市誌を執筆された杉浦茂治さんの資料から手を付けた。箱に何が書いてあるのかなどの記録もとりながら進めている。これを大事にしないと元々どのような経緯、どんな形で資料館に納められたのかわからない。資料整理はとても大変な作業だが、それを小島さんと土屋さんの2人で行っていただいている。ようやく資料の箱が開けられたという状態。一度整理した資料は、美術館に移動してもらい、その空いたところで吉浜から持ってきたものを整理して、また美術館へ運ぶ。空いたスペースで箱詰め整理をし直すという繰り返し作業になる。

これまでにもしかしたら、資料が失われるかもしれないような危機もあったかもしれないが、図書館・郷土資料館のスタッフの方は、よく守っていただいたと思う。何もわからない方が見れば価値のないものであると思う。これをいかにして活かし残していくかということが今回の調査だと思う。

今回の市誌ですべての分野・できごとが網羅されたり、調査されたことが全て報告でき

るといふことはないので、市誌の活動が終わってもぜひ継続して何かしらの成果物を出していきながら高浜市の皆さんに還元していくことを続けられるかが重要。せっかくこれだけの資料が見つかってきているので、今回の市誌だけで終わってはもったいない。是非ともこの委員会でもご意見をいただけたらと思う。

【委員】 現在の整理写真を見ていると、番号を紙に書いたものをテープで止めただけなので、ダンボールにタグをつけてわかるような仕組みを考えた方が良いのでは。また、ネガフィルムがたくさんあるかと思うが、40年50年と経過し、ずいぶん色も抜けているので、早く整理してスキャンを行い、データ化はもちろん貴重なものはプリントしておかないといけない。写真やネガは誰が調査するのか。先生が使いたいと言ったネガフィルムを出してくるということか。

【事務局】 誰が写真を専門に調査するかなどは決まっていない。現在はまず一次整理で、資料の全体数を把握するというを目的に行っているもので、そこから先のことはこれから決めていくことになる。一時整理した段階で、各調査員の先生方に資料を確認していただき、そこから執筆に使用する資料を調査していくということになるかと思う。

【曲田副委員長】 写真の管理や扱い、資料の撮影といったところの部分が予算的に取れていない状況なので、是非とも来年度予算では紙焼きフィルムのデジタル化等をやっていただきたいと思う。また、専門知識のある市民の方に資料を扱っていただいたりしながら進めていく必要があると思う。調査員が実際の資料を自宅に持ち帰ることはできないので、デジタルカメラでの資料撮影も必要であるし、あるいはコピーを取る必要もあると思うので、その辺は是非ともお願いしたい。

【委員】 この整理状況の写真を見ると、これまでとても残念な状態であったと思う。先ほど曲田先生が言われたように、残っていてよかったととても感じている。今回の市誌の作成で、掲載されるものとされないものがあると思うが、掲載されなくてもまた次の世代に伝えていかなければいけないものだと思う。今回だけで終わるのではなく、その後も継続していけるような方向で進めていければいいのではと思う。

【委員】 資料を捨ててしまうのは簡単。だがそれを探してくるのはどれだけの努力が必要か。簡単に捨てたりしてはいけない。

### 3. その他

<事務局 資料にもとづき説明>

【委員】 各所から集まった資料をどのように保管するのか。専用の部屋・場所が欲しい。各所に資料が散らばっているのは動線がよくない。どこかに編集委員会専用の部屋があるのか。スムーズに活動できるようになればいいと思う。

【事務局】 かわら美術館内に一部屋設けているが、正直キャパシティが足りず、その部屋で資料の保管から作業まで全てができる状態ではない。また、資料の保管だけでも足りない状況である。ただ、すぐに新しい部屋を確保する目途がたっていないので、当面は資料を美術館と図書館に分けて保管し、調査員の先生方には、美術館の講会議室等の部屋で調査をしていただくことになるかと思う。

【委員】 子育て中の親からすると、「高浜市の歴史」に対して関心の行き場があまりないと思う。まるごと宝箱に関してなど広報には情報が掲載されているが、そういった講座なども身近に感じる事が大切だと感じた。この場に参加している自分にできることは、「こういう場があるから是非参加してください」と皆に伝えることだと思う。

【曲田副委員長】 「大家族たかはま」という考え方の中で、例えば外国人の方で3世代に渡る方もいて、その子どもにとっては高浜が故郷になる。そのようなことをどういった形で市誌に入れたらいいか。例えば聞き書きのようなことができないのかどうか。また、それが市誌として馴染むのかということもある。今回の取り組みを、外国人の方にも高浜というまちを知っていただく機会にもしていきたい。ただし、それをどう形にしていくかが難しい。「大家族たかはま」のイメージを形にするというところを、編さん委員のみなさんも一緒に考えていただいて、何かしらの形にできないかと思っている。